

目次

『聞ク』と『尋ヌ』の展開……………	小林 賢次……………	一
——中世における〈質問〉の意味の拡大をめぐる——		
鎖のさされてさぶらふぞ……………	岩下 裕一……………	三
漢語「有無」……………	玉村 禎郎……………	三
——近代語への歩み——		
『長恨歌抄』に見える「まいけれども」をめぐる……………	坂詰 力治……………	五
——接続助詞「けれども」の成立説を検証する——		
抄物における助動詞「げな」の用法……………	山田 潔……………	五
『謡抄』における「謡」の注釈意識と用語……………	小林 千草……………	三
抄物資料における副助詞ガナ……………	小林 正行……………	三

類義語「功者」と「上手」の差異について……………宮内佐夜香……………三九

——天理本・虎明本における使用を中心に——

『和名集并異名製劑記』の諸版とその変容……………柳田 征司……………四〇

江戸俗字の解読と検証……………杉本つとむ……………四一

——西鶴作品を主として——

近世後期上方資料に見られるテルとチヨルについて……………増井 典夫……………四六

『桑名日記』にみる近世末期下級武士の人称代名詞……………山本志帆子……………四九

検索法多様化の余燼……………佐藤 貴裕……………五〇

——一九世紀近世節用集における——

馬琴の用語……………鈴木丹士郎……………五三

——券縁・欠安・羞殺・笑納・不勝の歎び——

『路女日記』における会話文の引用法……………大久保恵子……………五五

式亭三馬の半濁音符に関する一考察……………長崎 靖子……………六二

『呉淞日記』に見られる片仮名表記語について……………山口 豊……………六九

幕末明治期に生れた日本製の漢語……………鈴木 英夫……………七三

『日清会話』と『日韓会話』（参謀本部編明治二七年八月刊）……………園田 博文……………七九

——日本語資料としての位置付け——

漱石直筆原稿『それから』の振り仮名……………小松 寿雄……………八四

否定条件句「(行か)ないで、〜」と「(行か)ずに、〜」……………田中 章夫……………八六

鉄道駅名における分割地名の構造(続)……………鏡味 明克……………八九

副詞「よほど」の意味・用法について……………佐々木文彦……………九三

——近代から現代へ——

明治大正期関西弁資料としての上司小剣作品群の

紹介および否定表現形式を用いた資料性の検討……………村上 謙……………九六

明治大正期における補助動詞「去る」について……………小木曾智信……………一〇〇

明治民法典を編纂した人々の言語……………北澤 尚……………一〇六

——指定辞について——

「浮雲」の自己表現をめぐって……………森 雄一……………一〇六

J. F. ラウダー著『日英会話書』の日本語……………常盤 智子……………五三

——人称代名詞から——

『日葡辞書』と『日仏辞書』のヘボンの

参看の可能性をめぐって……………木村 一……………五六

執筆者略歴…………………………五七

「聞ク」と「尋ヌ」の展開

——中世における〈質問〉の意味の拡大をめぐって——

小 林 賢 次

用法の中心であることには変わりがなく、「問フ」三五例のうち二例（単独形一例、複合語一例）を除いて、すべて〈質問〉用法である。すなわち、鎌倉時代における「尋ヌ」は、意味拡張をおこして、〈質問〉の意味が中心になりつつあり、その意味領域において、伝統的な「問フ」の勢力の中に徐々に入り込もうとしている状況だと言えよう。

三 平家物語、歌論・能楽論書、謡曲などにおいて

三・一 平家物語の場合

ここで、説話集などよりも後の文献に目を転ずることにする。まず『覚一本平家物語』における「問ク」の例を見ると、明確に〈質問〉の意味と判断されるものは認められない。

① 商客のゆきかうもまれなれば、宮このつてもきかまほしく、いつしか空かきくもり、霰うち散、いとゞきえ入心地ぞし給ひける。（覚一本平家・巻一〇・藤戸296）

この「聞かまほし」は、前節における『方丈記』の「聞ク」と共通のものであり、〈聴取〉の意味にとるのが自然である。〈承知する〉の意味のものも、複合語「聞き入れ（ず）」の形で一例が見られる程度で、ほとんど〈聴取〉の意味に限定されている。一方、「尋ヌ」の場合は、九九例中〈質問〉用法のものが三一例（オン尋ネアリ）など複合語一九例を含む）を占める。〈質問〉用法の「問フ」が、複合語四例を含めて七六例あり、やはり「問フ」が〈質問〉の意味領域で中心の位置を占めていることには変わりがないが、「尋ヌ」の〈質問〉用法もかなり一般化していることが知られる。

② 六波羅殿の禿といひて（シ）しかば、道をすぐる馬・車もよぎてぞとほりける。禁門を出入すといへども姓名を尋らるゝに及ばず、京師の長史是が為に目を側とみえたり。（同・一・禿髮91）〔長恨歌伝——禁門を出・入す〕

るトキニ名・姓を問（ハレ）不、京・師の長・史、之か為に目を側む（正宗敦夫文庫本長恨歌伝正安二年書写本・三三行。福武書店影印）

③ 母やいもうと是をみて、「いかにやいかに」ととひけれ共、とかうの返事にも及ばず。俱したる女に尋てぞ、去事ありともしりてんげる。（同・一・祇王99）

④ 学頭がむすめ二人あり。ともに藏人のおもひものなり。是等をとらへて藏人のゆくゑを尋れば、姉は「妹にとへ」といふ、妹は「姉にとへ」といふ。（同・一二・泊瀬六代408）

例②では、この表現の典故となった『長恨歌伝』において「問」が用いられていたものを「尋ヌ」に置き換えている。例③④は、「尋ヌ」と「問フ」とが併用されている例である。意味の差はつきりしないが、「尋ヌ」の方が〈訊問する〉あるいは〈糾明する〉というニュアンスが強く出ているということは言えるであろう。

三・二 歌論集・能楽論集・謡曲などの場合

次に、鎌倉・室町期の文献として、まず歌論集・能楽論集を見ると、次のような例が認められる。

① 或人云、「逢坂の関の清水と云ふは、走り井と同じ水ぞと、なべて人知りて侍り。しかあらず。清水は別の所にあり。今は水もなければ、そこと知れる人だになし。三井寺に円実坊阿闍梨と云ふ老僧、たゞ一人其所を知れり。か、れど、さる事や知りたると尋（ぬ）る人もなし。……」（無名抄・関清水事51）

② 上手は、名を頼み、達者に隠されて、悪き所を知らず。下手は、もとより工夫なければ、悪き所をも知らねば、よきところのたま／＼あるをも弁へず。されば、上手も下手も、互に人に尋ぬべし。（風姿花伝・第三問答条々362）〔続く箇所にも「これを恐れて、人にも尋ね、工夫を致さば」の例がある。〕

③ 声合する所々は、定まりたるごとし。知らざらん所をば、為手に尋ぬべし。……出役人等のことは、なをく